

こほといせき

小保戸遺跡

(相模原市城山町No.51遺跡)

調査期間 20070201～20080229

所在地 相模原市城山小倉地
先

時代
旧石器時代
縄文時代
古代
中～近世



概要

本遺跡の調査は、国土交通省関東地方整備局による一般国道 468 号線(さがみ縦貫道路)建設事業に伴う相模原市城山町小倉の埋蔵文化財発掘調査として平成 19 年2月から実施しています。遺跡は相模川の上流部、串川との合流地点付近右岸の河岸段丘上に位置し、現地表面の標高は約 132m前後を測ります。本遺跡西側の一段高位の段丘面上には大保戸遺跡、串川を挟んだ対岸には津久井城跡が位置しています。

調査は、今後の道路建設工事の予定などから、調査区内を南北に二分して実施しています。調査面積は合計で約 12,500 m²を測り、南北両地区はこれをほぼ二分割した大きさです。

調査開始から現在までは、南地区の調査を実施しています。これまでに検出された主な遺構には、古代(または古墳時代)以降の竪穴住居址・溝状遺構・段切り状遺構・地下式坑・石垣・墓壇・土坑、縄文時代の竪穴住居址・土坑・集石などが挙げられます。

古代(または古墳時代)以降の住居址は、カマドを持っているものと持っていないものが確認されています。両住居址間にはこれまで明確な切り合い関係が認められる例は確認されていませんが、これらを覆っている覆土を観察すると、両者はそれぞれ異なった覆土で埋没しているようであり、両者間には時期差が存在している可能性が示唆されます。

この他、覆土中から板碑の破片が出土した溝状遺構、人骨と共に刀子と18枚の銭が束ねられた状態で出土した墓壇等は、いずれも中世の遺構と考えています。中世、津久井城跡と串川を挟んだ対岸の平坦地の利用形態を考える上で本遺跡は重要な位置を占めているものと考えられます。また、中世～近世のものと考えられる地下式坑は、壁と天井部の境界部に10～15cm程度の平坦な段を設けるといった特徴的な形態を呈しています。

縄文時代の遺構も既にその存在が明確であり、今後の調査成果が楽しみな遺跡です。



▲遺跡遠景(空撮)



▲焼失住居(古代)



▲地下式坑内部(中～近世)